

平戸安満嶽縁起

— 近世初期松浦地方の山岳信仰 —

福島邦夫

Hirado Yasumandake Engi:

The Mountain Belief of Matsunura

in the Early Edo Period

Kunio FUKUSHIMA

日本の西端にある平戸諸島はかくれキリシタンの地として知られている。しかし、十六世紀中葉以降、キリシタン勢力が浸透する以前は山岳信仰が力を持っていたことは意外に知られていない。その中心は、中部の安満岳（標高約五三五メートル）、および南部の志々伎山（標高約三四七メートル）であった。志々伎山については、既に紹介もされているが、¹⁾安満岳に関しては今までほとんど知られていなかった。その理由は、安満岳には楊柳山西禪寺という寺院があったが、一度ならず二度にわたって大弾圧を受けていることである。

安満岳を中心にごく概略だけを述べてみる。一度目は一五五〇年のポルトガル船来航、フランシスコ・ザビエルに始まるキリシタンの布教の時である。一五五五年には、もう、平戸領主、松浦道可公隆信はイエズス会インド管区長に宛て書状を送り、平戸で宣教師達を歓迎したいとの意向を伝え、その文中、松浦の親族数人が受洗したことを記したと云う。ルイス・フロイスの「日本史」によれば、それらは生月の籠手田一族であり、フロイス自身も度島で布教を行い、キリスト教は拡大の一途をたどっていた。もはや仏教勢力との衝突は時間の問題であった。再び、フロイスの記述によれば、平戸には安満岳^{ヤスマンダケ}という名の著名な高僧が住んでおり、あらゆる他の僧侶の首領であった。彼は常にキリシタンとその教えに対する最大の敵であり、彼の勧めで、十字架は破壊され、修道士は追放されたという。更にこの仏僧は殿様達と深い姻戚関係にあつて、何をしてでも罪科は問われなかった。常に修道士達はその事を極めて遺憾に思っていた。

ついに、一五六三年、肥州殿（隆信）にドン・アントニオは讒言し、それに従つて肥州殿は安満岳の所領を没収し、僧侶（神官）の頭を追放したという。実に翌年の一五六四年のことであった。²⁾そして、その頃、安満岳の麓、白石からロレンソという高名なイelman^{イelman}さえ出たという。彼は元来、盲僧であつたが、後に熱烈なキリシタンとなり、京都で活躍し名を残した。一五九三年に長崎で没したという。盲僧というからは、安満岳の山岳信仰の側に

あつたはずの人である。その中からキリシタンの側に身を投ずる人間が出たのである。現在の山頂にも十字の石仏が残るといふ。

その後、一六〇〇年、安満岳中興開山、善意の名が史料にあらわれる。法印公鎮信は自ら、法印と名乗り、反対に仏教を再興し、手厚い保護を加えたのである。近隣の諸公も、仏弟子として安満岳と仏縁を結ぶのである。当時の平戸は、中国、ポルトガル、イスペインア、オランダ、イギリス等の諸国の貿易船が港に出入りし、松浦氏は貿易で栄えた頃である。しかし、鎮信は逆に慶長四年（一五五九）頃から、キリシタンの弾圧を開始し始め、ここに周知のキリシタン殉教の歴史が始まるのである。政策はめまぐるしく転換した。翻刻する安満岳縁起も寛永五年（一六二八）の銘があるので、この頃書かれたものであらうと推測される。

その後、安満岳は二度目の弾圧を受ける。明治政府の廃仏毀釈の嵐である。西禅寺は廃寺となり、仏像仏具は最教寺へ移され、大部分の文書は散佚した。白山権現は白山比丘神神社と改称され、老岐の神官、後藤正恒氏が明治三年に社司に任命されたといふ。こうして安満岳の歴史は最後の幕を閉じたのである。³⁾

ここに翻刻する資料は、そうした中でわずかに残された「休岳温知録第九」に記載されている「休岳縁起並口伝録」の一部である。（口伝録は紙数の関係上省略した。）「休岳温知録第九」は平戸市蔵、冊、七十七頁、縦二三・五cm、横一六cm、寛政八年（一七九六）、道盈記とある。道盈の記すところによれば、縁起の

原本は前々住、順果が寛永5年（一六二八）に筆写したものをさらに正書したものといふ。⁴⁾

縁起の内容も近世初期の典型的なもので、泰澄の開山、行基の来山から説き始めるが、休岳の名称は松浦氏存亡の危機を救った鳥が羽を休めた所である所から来たといふ伝承や櫛しんみの由来が説かれ、当時の松浦地方の民間伝承、人々の自然観を良く表している。また、神功皇后や対馬の地名伝承も伝え、白山信仰が同時に海民の信仰であったことを示している。更に白山妙理権現を臨濟宗の祖、栄西の招来したものと説くなど平戸独特の興味深い記述もある。また、十一面観音を本地としてその垂迹を伊弉諾尊と説くなど神仏混淆の様子は修験道の本来の特徴とも言えよう。筆者個人の興味を引くのは、新羅の僧、元暁、道昭といった名が登場する点で、当時の知識人であつたであろう縁起の著者の仏教や修験道の理解であり、視野の広がりである。様々な観点から、本縁起は興味を引き起こすであらうと思ふ。

註

- (1) 吉田収郎「式内社神社志々伎神社」芸文堂刊、昭和六十一年
- (2) ルイス・フロイス「日本史9」一四一〜一四二頁、その他、中央公論社刊、昭和五十四年
- (3) 浦 恒一「宗教史としての安満岳」昭和四十六年九月稿、私家版
- (4) 福島邦夫、平成七年度科学研究費、一般研究（C）研究成果報告書「九州北西部離島における修験道―平戸諸島の修験寺院の歴史民俗学的研究」、平成八年三月

安滿嶽緣起

夫安滿嶽者靈石高聳、枯木神風動、本地之靈驗、昕日迥若木枝上遍、扶桑國照兩取之巖洞侍從神春之居取也。寶殿之後面之禪定片石以巧筑石室三取有。三聖劫初坐斷給幽室也。寔是靈驗無雙之勝地利生揚焉之妙場也。當山、東方陸大海十二町也。遠對馬百里外見、近五島里之間見。西北方生月多久島大嶋隣、南百鳥眼下見小泥團如。蓋島些少、非此峰高勢依觀也。古老相傳云、筑紫松浦富士來見霞迷雲浮嶽。万葉集之有云云。乃當山事也。人王第十代當給崇神天皇御宇熊野本宮顯給。或時天竺摩訶陀國王鳳凰、我日本國熊野飛給時、五嶋馬背嶽此峰飛着、鳳凰羽休給。依此峰休嶽云。元正皇帝御宇養老二年三月十八日、泰澄此峰登持誦給。時妙理大菩薩顯給。然己來衆生安慰所願能滿、故此峯安滿嶽名云。

恭惟白山妙理大菩薩本地十一面觀世音菩薩也。此菩薩幻如聞、勲聞修金剛三昧住三十二應成。經佛身終人非人等至三十二應云如。種種形現衆生苦、脫無畏施給五觀力。自在以成就者也。夫五觀者真觀、清淨觀、廣大智慧觀、非觀及慈觀也。真觀以妄想顛倒息清淨觀以愛染治、智慧觀以惑破、悲觀以苦拔、慈觀以樂與。此五觀力以群迷加被故妄染惑苦念應息滅。觀世音菩薩幻如聞勲聞修。金剛三昧住三十二應成耳非、種種形以娑婆世界遊、有所衆生度脫給。過去久遠劫先正法明王如來應供正遍智明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊十号具足佛也。然云弘誓深海如怖畏急難中於位下衆、生濟度為菩薩現。華嚴兩輩、法華窮子引導方便如。然我日本國於伊弉冉尊陰神、陽神伊弉冉尊顯給。即日域男女之元神也。天照大神御母、天神七代當給神也。後地神五代經人

王初代主給神武天皇号奉也。然後元正天
王御宇養老元年四月加賀国大野隈、
箱河東林泉泰澄彼雪岳絶頂登緑碧池側
居持誦。忽九頭龍、頭角崢嶸出現。
泰澄云惟方便現鉢也。

(山崎貞と書き込み有り山峻事(?)か一福島)

本地真身非云持念弥確又頃刻十一面觀自
在菩薩妙相端巖光彩赫熾池面出現。泰
燈替首頭面接禮拜言像未衆生願救
拯垂給。時菩薩金冠搖連眼瞬此言許給
妙鉢既陰泰澄又左澗渡孤峯登。一偉丈夫
逢手金子箭握肩銀弓橫笑含曰、我是妙
理大菩薩輔也。輔左大臣事也。名大己貴
云。西刹主也云。了隱。又右峯登一奇眼
老翁、神宇、閑雅見。語云我是妙理大菩薩
彌也。彌右大臣事也。名因白山大行事云當
知聖觀自在變身也云了及子隱也。余自泰
澄彼峯居苦修益勤神異著或時泰澄白山天
領遥西方望見給祥雲、宇宙橫端氣、乾坤
滿殊勝靈地有事千里外見筑紫下此峰登禪定
居持誦。妙理大菩薩顯給。加賀国白山天領
出現端相全同者也。此峰泰澄登給時實養老

二年三月十八日也。神龜二年、行基加賀
白山登。泰澄見奉笑含舊識如。行基白山之
靈應澄問。泰澄詳是語。行基感云元正皇帝
公神融号良以有哉。又公三神氏託生
宣哉。三聖應跡顯。予年五十七未路歎多
峽絶憚不來勝地踏。幸神化聞我心満足再
會西土有願盟忘事莫、歎密去行基西土再
會有。盟西方安滿嶽會可云契約也。所以者
何行基日本国中山家村里残不順国、衆生濟
度給依平戸奥高野於手毘沙門天王像刻伽藍
建立彼尊像安置了速此峯登泰澄語云越知山
天領對談。今此峰再會奉快喜至勝計云々。

因行基樞實三粒持來掌上置此捧泰澄語云此
峰末代密乘相應地也。豈樞樹無哉云手樞實
三粒植給今至満山森繁榮末代龜鏡者也。
參詣之族各樞枝折或手持或腰腫歸宅門戸挿
攘災保安驗。泰澄阿弥陀應化、行基文殊化
身、忝白山妙理大菩薩十一面觀自在垂跡
也。又此峰二鳥有此妙理大菩薩使者也。每
年二子生。漸反哺後親鳥飛去生所二鳥當山
留棲。其外別鳥無古相伝云彼親鳥伊勢国天
照大神御在河邊神風宮參云云。

當山南方峰。天拘棲依天拘嶽云。絶頂高廣大石澄此石上坐四方結界持念給其(尔)時天拘等石側跪白(?)逢難無上甚深微妙法聽聞。自今以後此山煩作佛仏擁護由堅泰澄契諾云云。泰澄當人語曰妙理菩薩曰

我山中一草一木我眷屬之所居非云事。一万眷屬妙德降跡也。十万金剛童子遍吉化垂也。五万八千(采)女堅牢天女變作也云云。佛三不能有神五不能有。然佛神不信仰者度能不。又無緣衆生度能不佛曰實我信仰緣無衆生我惡罵捶打。是緣度云云。是故神和光同塵或時高山絶巔居(左に高山禪定ナリと書き込み有)衆生歩運或時市塵交往來人間訊礼拝受縁結或時路傍神現路辻跡垂アクク神呼木枝草葉既受縁衆生度給。

是如悲願甚深仰信力弥堅固神冥加護憑奉現當二世願望成就疑有又神宮皇后百濟国征討時軍船數四十八艘也。諸神評議依往吉大明神一身四十八身化四十八艘楫取定給。我當山伊弉諾尊御船先船定給然而程對馬鴨瀬浦着纜繫着到。

纒軍勢數二百八十餘神也。

(欄外に書き込み有、異説云云紀国安曇磯良称奉筑前国博多志賀大明神楫取云云。)

余依鴨瀬一社二百八十餘神勸請奉今至對馬貴賤諸人婦依渴仰奉也。然而豊崎郡豊浦順風待給豊浦側海岸孤絶、地景希代面白靈所有。其地諸神鞠会有其許皇后履掛被松有此松名履掛松云其地里人呼鞠崎云也。然而百濟国渡百濟国伐順帰国給。今山御輿振時山王二十一社中、客神御前御輿先為百濟征討時先船佳例依也。客神御前者我山伊弉諾尊異名也。又千光院葉上僧正渡唐時香合中妙理菩薩勸請奉頸懸佛法守護神憑奉太白山天童景德虚庵和尚禅宗嗣日本帰朝筑前国博多聖福寺建立給。日本禅院最初也。在唐間擁護依道躰安穩也。報恩故聖福寺勸請令每月初八日白山諷經号鐘撞大衆集社頭就勤行致也。山門西廟脇積善社壇有是白山宮也。然後葉上々洛建仁寺。次鎌倉寿福寺、勸彼兩寺同白山妙理菩薩勸請。京都鎌倉兩寺於良久大明神号奉是白山妙理菩薩也。社頭行事聖福寺全同也。白山二字加賀天領限。妙理大菩薩之五字上必白山二字有。

白字尤深理。文繁多故畧。抑加賀天領當山於伊弉諾尊白山妙理大菩薩顯給事全同。或人、問云、神号但一所依更事何哉。予答云、古語云、聖人名無但、其時利生作畧道徳名呼奉、故天神第七代時伊弉諾尊加賀天領當山、聖福寺於白山妙理大菩薩稱奉、觀山客神御前、稱京建仁寺鎌倉、壽福寺於良久大明神稱奉也。本地十一面名、多端垂跡妙理菩薩、數名御(坐)在、應化利生時分依也。又問云、加賀天領養老元年丁巳四月一日、泰澄雪嶽絶巖登。應化依泰澄開山、此峰同養老二年庚三月十八日、妙理菩薩顯現給依泰澄開山。兩所建立之中間、月數纔十ヶ月、日數許多。早晚隙、數ヶ国隔、兩所建立有、神明是非。泰澄肉身凡夫也。訝如何予答、日前云、泰澄阿弥陀、應化、行基文殊化身、忝白山妙理菩薩、本地過去、正法明王如來、現在十一面觀世音菩薩、未來、普光功德山王佛、實正覺三世唱應用、十萬示。古徳要文集云、靈山、在法華名(今)西方在、弥陀名濁世(末)代、觀世音三世如來(右に「利益」と書入れ有)一鉢。故三聖同心、互相證明衆生濟度、方便門聞。法身

無相應物現形。凡夫肉眼以佛菩薩神明、接物利生、疑生事。請觀音經云、毘舍利国一切人民、五(右に「七」の書入れ有)種大惡病遇、一眼赤血、如、二兩方耳膿出、三鼻中血流、四舌言、事、五食處物化、愈洩、六識閉塞、酒醉人如、又五夜叉有、夜叉王名訖拏迦羅、名、面黑事、墨如、五眼、犬牙如、牙、人精氣吸時、毘舍利大城中一長者、名月蓋云、其同類長者五百人、俱積尊所請、右邊事三遍。頭面足接禮拜、一面坐佛白言、此国人民大惡病遇。醫師耆婆力盡救事。願世尊、衆生憐愍病苦救給。余時世尊長者告曰、西方佛在。其名阿弥陀佛云。彼菩薩有。觀世音菩薩及大勢至菩薩名。常大悲以一切衆生憐愍苦厄救。汝等今彼向一心禮拜、燒香散花、彼阿弥陀佛、二菩薩請奉。是語說了、眉間白毫光放、西方照給。阿弥陀佛并二菩薩、即時西方來、毘舍利国城門住大光明、放毘舍利国地皆金色交。余時毘舍利人楊技并淨水、觀世音菩薩授与諸名香、熱五鉢投地合掌、我等苦厄救給言。余時觀世音菩薩、遍一切衆生、為三種、陀羅尼、說給委細、經見。此經一切經中、知字、函。三陀羅尼者、消伏毒害、陀

羅^ロ尼^ニ、破^ホ惡^ア葉^シ障^シ障^ウ羅^ト羅^ロ尼^ニ、六^ル字^ズ章^シ句^ウ陀^ト羅^ト尼^ニ也[。]
觀^ク世^セ音^ン菩^ツ薩^サ此^レ三^ニ陀^ニ羅^ニ尼^ニ說^キ了^レ毘^レ舍^レ利^ト人^ト平^ニ復^ニ
本^{モト}如^シ。死^シ山^ニ野^ニ棄^ル者^{ヨミ}皆^カ蘇^カ道^ニ路^ニ佇^ム。委^ス細^ヘ錄^ニ
云^ヘ。文^{ナル}繁^{カニ}多^ク故^ス畧^ス。

西^シ方^フ極^ク樂^{ラク}世^セ界^{カイ}南^{ナン}部^ブ州^{シュ}十^{ジュ}萬^{マン}億^億土^ツ隔^テ有^ル國^{クニ}時^{トキ}
移^{サス}阿^ア弥^ミ陀^タ、觀^ク音^ン來^リ現^シ給^フ。加^カ賀^カ肥^ヒ前^ノ之^ノ間^ノ遠^レ遠^レ
云^ナ事^ケ。小^コ智^チ小^コ見^ミ以^テ弥^ミ陀^タ、文^フ殊^シ、觀^ク音^ン廣^ク大^ク靈^ニ
感^{カン}疑^ニ謗^ハ事^ケ。聖^{セイ}德^{トク}太^{タイ}子^シ前^ノ身^ノ大^{ダイ}唐^{トウ}南^{ナン}岳^{ガク}思^シ禪^{ゼン}師^シ也[。]
衆^{シュ}生^{シヨウ}濟^ジ度^{トク}為^ニ日^ニ本^ニ誕^ス生^ス。或^ル時^キ大^{ダイ}臣^ニ書^シ簡^カ持^チ
唐^{トウ}土^ツ渡^ワ舊^{キウ}時^ジ持^チ經^{キョウ}本^{ホン}并^ニ道^{ダウ}具^キ等^{トウ}乞^キ給^フ、南^{ナン}岳^{ガク}衆^{シュ}僧^{ソウ}
等^{トウ}、奠^{ケン}（左^ニに「セツ乞」と書込み有）道^{ダウ}具^キ、不^ズ正^{ジヤウ}經^{キョウ}
教^{ケウ}等^{トウ}度^{トク}与^ス、太^{タイ}子^シ緘^{ケン}開^カ見^ミ曰^ク是^レ朕^カ奠^{ケン}具^キ也[。]乞^キ
所^{トコロ}具^キ非^ズ曰^ク坐^ザ起^キ居^{キョ}室^{シツ}入^ニ戸^ニ閉^セ定^{テイ}入^ニ給^フ。七^{シチ}日^{ニチ}中^ニ
定^{テイ}出^{シュツ}南^{ナン}岳^{ガク}惜^{シク}三^{サン}留^{リウ}所^所持^チ經^{キョウ}道^{ダウ}具^キ等^{トウ}出^{シュツ}諸^{シヨ}人^ニ見^ミ令^シ給^フ。
其^{コノ}比^ヒ南^{ナン}岳^{ガク}思^シ禪^{ゼン}師^シ金^{キン}龍^{リウ}乘^{シヨウ}日^{ニチ}本^ニ國^{クニ}來^リ南^{ナン}岳^{ガク}惜^{シク}留^{リウ}所^所
持^チ經^{キョウ}道^{ダウ}具^キ等^{トウ}取^テ日^{ニチ}本^ニ歸^ル。唐^{トウ}土^ツ一^{イツ}天^{テン}下^カ披^ヒ露^ロ島^{トウ}云^フ。

（左に「彼与」と書き込み有）

新^{シン}羅^ラ國^{クニ}之^ノ元^{ゲン}曉^{キョウ}異^イ人^ニ也[。]事^ジ跡^{セキ}多^タ端^{タン}雖^シ文^{ブン}繁^{マン}故^コ畧^シ。
大^{ダイ}唐^{トウ}玄^{ケン}奘^{ゾウ}天^{テン}竺^{チク}十^{ジュ}六^{ロク}年^{ネン}行^{キョウ}脚^{キョク}百^{ヒャク}三^{サン}十^{ジュウ}ヶ^ケ國^{クニ}耳^{ミミ}目^メ見^ミ
聞^ク。然^{シテ}後^{ノチ}大^{ダイ}般^{パン}若^{ニャク}經^{キョウ}背^セ負^フ大^{ダイ}唐^{トウ}歸^ル。万^{マン}回^{クワイ}語^ゴ云^フ我^ガ
母^ボ安^{アン}否^ヒ聞^ク思^フ通^{ツウ}路^ロ万^{マン}里^リ也[。]色^{シキ}々^々音^{オン}聞^ク遂^{スエ}難^{ナン}云^フ
嗟^サ歎^{タン}。万^{マン}回^{クワイ}云^フ我^ガ往^{イテ}歸^ル國^{クニ}事^ジ公^{コウ}（父^フ？）母^ボ告^{コク}云^フ

信^{シン}書^{ショ}玄^{ケン}奘^{ゾウ}乞^キ持^チ去^ク母^ボ報^{ホウ}万^{マン}里^リ路^ロ一^{イツ}日^{ニチ}中^ニ歸^リ來^テ答^{トク}書^{ショ}
玄^{ケン}奘^{ゾウ}度^{トク}与^ス。余^{ヨリ}自^{ヨリ}己^ニ來^リ唐^{トウ}人^ニ本^{ホン}名^ナ呼^フ此^レ人^ニ名^ナ万^{マン}回^{クワイ}
呼^フ也[。]天^{テン}竺^{チク}維^イ摩^マ居^{キョ}士^シ八^{ハチ}方^フ一^{イツ}丈^{サウ}座^ザ敷^キ三^{サン}万^{マン}二^ニ千^ニ
獅^シ子^シ麻^マ立^リ佛^{ブツ}（弟^{テイ}）子^シ招^{シヤウ}請^{キョウ}座^ザ役^{ヤク}小^コ角^{カク}（右^ニに「役行者
也」との書き込み有）一^{イツ}言^{ゴン}主^{ジュ}（欄^{ラン}外^ノに「一^{イツ}言^{ゴン}主^{ジュ}神^{カミ}大^{ダイ}和^ワ
國^{クニ}葛^カ木^ク鴨^{ヤク}明^{メイ}神^{カミ}異^イ名^ナ」との書き込み有）神^{カミ}夢^ム中^ニ讒^{ゼン}訴^ソ
依^イ伊^イ豆^{トウ}大^{ダイ}島^{トウ}左^サ遷^{セン}（右^ニに「放^{ハウ}逐^{チク}」と書き込み有）又^{マタ}禁^{キン}
獄^{ガク}云^フ畫^{ガク}晏^{ヤン}然^ニ獄^{ガク}中^ニ在^リ人^ニ知^ラ夜^ヤ亡^{ハス}見^ミ獄^{ガク}直^{チキ}等^{トウ}
恠^ケ見^ミ何^ニ處^ニ出^シ云^フ事^ジ知^ラ。外^ノ出^シ手^テ香^{カウ}炬^{キョ}持^チ翻^{ペン}々^々
虛^{キョ}空^{クウ}步^フ西^シ方^フ去^ク每^{メイ}夜^ヤ是^レ如^シ。不^ズ曉^{キョウ}必^{キヤク}歸^ル獄^{ガク}中^ニ居^ス。
是^レ眼^{ガン}著^{シヨク}見^ミ每^{メイ}夜^ヤ富^フ士^シ禪^{ゼン}定^{テイ}指^シ翻^{ペン}々^々之^レ去^ク。此^レ事^ジ獄^{ガク}
吏^シ（左^ニに「ロウウツカサトルモノナリ」との書き込み有）京^{キョウ}都^ト
奏^{ソウ}申^{シン}時^ジ公^{コウ}鄉^{キョウ}評^{ヘイ}議^ギ有^リ云^フ這^{コノ}般^{パン}異^イ人^ニ惡^{アク}當^{トウ}向^{キョウ}後^{ノチ}、
國^{クニ}煩^{ワン}作^{サク}被^ヒ赦^{シヤク}免^{ケン}獄^{ガク}出^シ。其^レ後^{ノチ}草^{ソウ}結^{ケツ}船^{セン}作^{サク}田^{テン}
上^ノ役^{ヤク}小^コ角^{カク}鉢^{ハツ}孟^{モウ}（左^ニに「ホユトハ三^{サン}衣^イ一^{イツ}鉢^{ハツ}ノハチノコトナリ」
との書き込み有）應^{オウ}量^{リョウ}器^キ乘^{シヨウ}唐^{トウ}土^ツ渡^ワ。道^{ダウ}昭^{シヤウ}法^{ホフ}師^シ唐^{トウ}土^ツ
在^リ時^ジ、五^ゴ百^{ヒャク}群^{クン}虎^コ共^ニ來^テ作^{サク}礼^レ。一^{イツ}虎^コ人^ニ語^ゴ曰^ク新^{シン}
羅^ラ山^{サン}中^ニ衆^{シュ}虎^コ之^ノ所^所伏^{フク}也[。]師^シ山^{サン}赴^キ我^ガ暴^{ボウ}獐^{シヤウ}導^{ドウ}。昭^{シヤウ}
默^{マク}請^{キョウ}受^{ジュ}乃^{ノチ}彼^{ノチ}至^シ法^{ホフ}華^カ講^{キョウ}。群^{クン}虎^コ側^{ソバ}聽^{キク}。其^レ中^ニ和^ワ
語^ゴ者^{シヤ}有^リ。進^{シン}曰^ク我^ガ是^レ日^{ニチ}本^ニ國^{クニ}役^{ヤク}小^コ角^{カク}也[。]昭^{シヤウ}愕^{ガク}
然^{シテ}問^{トク}曰^ク何^ニ在^リ比^ヒ乎[。]
對^{タイ}曰^ク我^ガ今^{イマ}此^レ山^{サン}住^{ジユ}異^イ類^レ化^カ耳^ニ（矣^{ナリ}）此^レ事^ジ道^{ダウ}昭^{シヤウ}日^{ニチ}

對^{タイ}曰^ク我^ガ今^{イマ}此^レ山^{サン}住^{ジユ}異^イ類^レ化^カ耳^ニ（矣^{ナリ}）此^レ事^ジ道^{ダウ}昭^{シヤウ}日^{ニチ}

本帰朝(披)露セラルト云云。

養老六年、秋、主上惱有御祈禱、為泰澄宣都
赴フモカム。從弟子、淨定一人召具泰澄、時及參内
哺時申時。淨定語云、三鉢杵、白山室在急々
採来。淨定白山還杵、採成剌泰澄授。王公以
下嘆伏云事。皆曰泰澄云、淨定又奇也。
脱發心、從弟子、淨定然也。何況師匠泰澄乎。
高麗、唐土、天竺、日本之間、肉心云、是如事
多。是皆肉身聖人也。汝小智小見、以泰澄肉
身、凡夫云、即拔舌朱耕過。應化作畧、同年、
同月、又同時事有。十一面觀世音菩薩、本地伊
弉諾尊、現給跡也。次伊弉尊、以本跡、中本也。
妙理菩薩、以跡、跡、中跡也。乃本跡重々、顯
現無盡事、示給也。梵網經、周匝千華上、復千
釈迦現。一華百億國有。一國一釈迦有云如。
凡夫肉眼所見、以佛菩薩、神明、現躰年月、前後、
同時、疑事。泰澄、阿弥陀化現、行基、文殊、應身、
白山、妙理菩薩、十一面觀音自在、變相也。前謂
所昔在靈山、名法華行基事也、又問曰、昔在靈
山、名法華云、句爰於文珠、釈意旨(趣か?)如何哉。
予答云、過去燈明佛、滅後、妙光菩薩八十小劫之
間、人為法華經演說給。妙光菩薩、便是文殊

菩薩前身也。靈山會上、釈尊眉間、白毫相、光放
東方、大千世界、照四華、六瑞相、神變相、現三昧入、
希有相作。今此佛神通光明相、誰問、余時、弥
勤菩薩、是念、作文珠、過去無量諸佛、親近、供
養奉。必此希有相見。我今當文珠問奉、靈
山一會、大衆疑心滅、欲、文殊菩薩問云、何因緣
以此瑞相。一々、釈世間眼、為群盲疑、開給云。
文殊云、過去諸佛、是如瑞相、現即法華經說給。
今、釈尊定法華經、說給。答文繁、故委細錄。古
德、四句偈、結時、此意、借隱密文殊法華云也。
西方、在名、弥陀、泰澄也。濁世末代、觀世音、
忝、白山、妙理、大菩薩也。此三世、如來、同一躰、
故、同時、顯衆生、化度給也。仏菩薩、神明、廣、智、慧
方便、門、修、十方、諸、国土、二、刹、身、現、神明、廣、大
慈悲、堅、固、信、仰、帰、命、頂、禮、縁、結、奉、苦、惱、死、厄、於、能
為、依、怙、作、給、慈、眼、以、衆、生、視、給、福、壽、施、給、事、海
無量、如、疑、生、勿、至、禱、至、禱。

右、當、山、安、滿、岳、座、主、權、大、僧、都、前、司、當、官、法、印
諱、成、證、予、示、曰、當、山、事、跡、只、口、傳、耳。簡、札、之、記
無、後、代、兒、孫、恣、任、我、意、臆、談、他、信、力、妨、恐、
庶、幾、之、記、簡、札、云。余、老、拙、已、受、主、之、教、授、得、
老、眼、與、惡、筆、後、見、之、嘲、弄、雖、怖、候。古、書、依、斷

為紙破損文字中絶後日写本黠白紙了。

寛永五年十一月十八日

前々住、順果八(々)一歳

當住全海

此縁起正本先住順果正筆之有。此本其後誰カ所記歟。前後虫損然若一本非常戒似無。之故弟子某之補畢。干時寛政八辰七月廿三日

卅三世

道盈

書下し文 凡例及び註

(凡例)

古書体、異体字については現代の字体に改めた。多字劃の正字は略字に改めた。但し、原文の意を表すために残したところもある。解釈上筆者が補った字は()で示した。原文中、虫食、欠字は□で示し、筆者の責で補った。返り点は省略した。原文中の右側にカナでフリガナが付記されていたのでそれを生かした。原文中の左のフリガナは()で示した。但し、筆者の補ったものは()で示した。又、濁点は原文のままとし、補訳のみ付した。欄外の書き込みはその都度()の中に示した。

(註)

- (1) 扶桑国とは日本国の総名。
- (2) 劫とは、非常に長い間。
- (3) 揚焉と読み、はつきりと明らかなき様子。
- (4) 浮嶽は「松浦記集成」によれば、肥前国松浦郡白木山のこと。筑紫富士とも吉井嶽とも云う。白山権現がまつられ、航海安全、漁民の信仰を集めたと云う。
- (5) 「泰澄和尚伝記」(天徳本)によれば、泰澄は越前国、麻生津生。父は三神安角、母は伊野氏。誕生は白鳳二十二年。浄定を弟子として、加賀白山を開山。養老六年(七二二)水高天皇の御不予を加持し全快させる等、活躍したと云う。
- (6) 養老元年(七一七)、泰澄が白山に登嶺。同三年頂上に十一面觀音を祀り、高句麗媛を崇敬。その後、白山比咩の神とも、白山妙理大菩薩とも。大汝峰には大己貴を祀り、本地阿弥陀如来を置いたと云う。(白山記)その後、頂上に三神がおかれ、中央女神と菊理媛、右は伊弉諾尊、左は伊弉冉と記す。「大永神書」白山神社蔵 大永八年(一五二八)
- (7) 愛染とは情欲、もしくは、何かに対する激しい情熱。
- (8) 三十二相か? 佛の肉身や転輪聖王に備わる三十二の優れた吉相。
- (9) 久遠劫、無限に遠い過去。
- (10) 応供、如来の十号の一つ。
- (11) 遍智、四諦の理を完全に了知することにより、煩惱を断ずること。
- (12) 世間、ここでは世俗的欲望と解した。
- (13) 師佛、四佛力(?) 金剛界曼陀羅において大日如来の四方に位置する佛。
- (14) 世尊、釈迦、仏陀。
- (15) 弘誓深如海、法華経「弘いなる誓い深き海の如く劫を歷ると思議しえざらん。」
- (16) 怖畏、畏怖か(?)。
- (17) 日域、日本国のこと。
- (18) 崢嶸、高く険しい様子。

- (19) 赫熾、赤くさかんな様子。
 (20) 替首、首が地に着くまで体を屈すること。
 (21) 正像末、正法と像法と末法。正しい教えの破壊された末世。
 (22) 極救の誤り(か?)救済の意。
 (23) 白山大汝峰に祀られる。通称大國主の命。
 (24) 西利、西ノ國土のこと。
 (25) 神宇、神の地。
 (26) 奈良時代の高僧、天武十年(六八一)生。和泉の人。養老及び神龜年間、諸國を巡遊。池堤設置、寺院、道路、橋等を建設。天平二十一年(七四九)寂。
 (27) 託生、姿を借りて生まれること。
 (28) 孔子、老子、釈迦と解すると中国の影響を重く見ることとなる。
 (29) 款の俗字、款密とはうちとけて親しくなること。
 (30) もくれん科の有毒常緑樹。全体に香氣有り、仏前に供える。線香の材料ともなる。ちなみに長崎市外の式見は、橘より取ったと云う。
 (31) 反哺、親鳥が子鳥に餌をやること。ちなみに、松浦氏には靈鳥によつて、窮地を救われたという伝承がある。鳥が羽を休めたため、休嶽とも。山中に鳥に餌を供える「えさ石」有り。
 (32) 現在の頂上には簡素な本殿有り。本殿裏には巨石有り。そこより生月を望む。村人はそこまで、はだし参りをしたという。(筆者聞き書き)
 (33) 泰澄が安満嶽に初めて登った時、既に別の宗教者の集団が居り、それを天拘と呼んだものか?
 (34) 本文中には「米女」とあるが、意味を考え采女と補った。
 (35) 堅牢天女、地神盲僧の伝承では堅牢地神という神が語られる。
 (36) 捶打「スイダ」と読むのが正しい。むちで打つこと。
 (37) 和光同塵、知恵の力を深く秘め、顕わさないことを和光と云い、世の塵俗に交わることを同塵と云う。
 (38) 山の頂上。
 (39) 市麴、町の家、この文は修験の修行生活を表現したものでらう。
 (40) 呪、手向けと書き、神への捧げ物のこと。

- (41) 纒、僅かと同じ意味。
 (42) 葉上は榮西の別號、後に千光大法師の徽号を宋の朝廷より、賜わったともいう。
 (43) 虚庵 景德寺 天台山萬年禪寺における榮西の師僧。
 (44) 聖福寺は榮西の開山と伝える臨濟の古刹。建久二年(一一九五)創建。日本最初の禪寺。
 (45) 應化利生、仏菩薩が姿を変えて、この世に出現。衆生のために法を説くこと。
 (46) 愈洩、荒く、しぶいこと。
 (47) 耆婆、ジーヴァカの写音。ブツタ時代の名医。
 (48) 白毫、仏の眉間にある白い毛の輪のはえた所、仏はそこから光を放つとされる。
 (49) 安満岳には楊柳山西禪寺という寺があった。
 (50) 万回「何度も」の意味。ここでは人名。
 (51) 音聞、音問、たよりのこと。
 (52) 嗟歎、なげくこと。
 (53) 主語は元暁であろう。即ち、新羅の元暁が、玄奘の手紙を取りつき、万回と呼ばれたこととなる。
 (54) 役小角、修験道の祖、奈良時代、吉野の金峰山、大峰などを聞く。一言主の譏によつて伊豆に流される。
 (55) 晏然、やすらかな様子。
 (56) 這般、シヤハン「これらの」の意味。
 (57) 所伏、所領か?
 (58) 昭、道昭法師のこと。
 (59) 主上、天皇のこと。
 (60) 哺時、申の時、現在の午後四時頃。
 (61) 戌ノ剋、戌の刻、現在の午後八時頃。
 (62) 抜舌、抜舌地獄からか、言葉によつて舌を抜かれる地獄。
 (63) 朱耕、美人の赤い口、転じて口がうますぎること。
 (64) 梵綱經、菩薩の階位と戒律に関する經典。
 (65) 周匝、めぐりまわること。

- (66) 四華、四果か？小乗仏教では修道の段階に四つ有りと云い、それぞれに得られる果報を言う。
(67) 六瑞相、仏が法華経を説いた時にあらわれた六種の目出たい現象。
(68) 刹、刹那、短い間。
(69) 依怙、たのみとすること。
(70) 一六二八年。
(71) 「々」と読むと八十八歳、「与」と読むと八十一歳
(72) 一七九六年。

(一九九六年四月三〇日受理)

なお、本稿は平成七年度科学研究費補助金「九州北西部における修験道―平戸諸島の修験寺院の歴史民俗学的研究」の研究成果の一部である。